論　文

学部留学生を対象とした入学前事前学習プログラムの試み

○京　祥太郎*1　薬師寺　徹*1　山口顕秀*1

キーワード：留学生教育、学部留学生、学士力、学力の 3 要素、問題解決力

1　はじめに

文部科学省の中央教育審議会は、2008 年の「学士課程教育の構築に向けて」（答申）において「学士」 の学位によって保証されるべき一定の能力を「学士力」という言葉で表現し、学士力に関する主な内容として以下の 4 つの分野に分類した。

1. 知識・理解（①多文化・異文化に関する知識の理解、②人類の文化、社会と自然に関する知識の理解）
2. 汎用的技能（①コミュニケーション・スキル、②数量的スキル、③情報リテラシー、④論理的思考力、⑤問題解決力）
3. 態度・志向性（①自己管理力、②チームワーク、リーダーシップ、③倫理観、④市民としての社会的責任、⑤生涯学習力）
4. 統合的な学習経験と創造的思考力[1)]

また、2015 年 1 月に文部科学省により「高大接続改革実行プラン」が発表され、現在、高大接続改革の取り組みが進められている。[2)]「高大接続改革」とは、高等学校教育と大学教育、両者を接続する「大学入学者選抜」を、連続した 1 つの軸として一体的に改革するものと定義され、「学力の 3 要素」を育成・評価するための一体的な改革とされている（文部科学省高大接続改革 PT，2017）。「学力の 3 要素」は以下の通りである。

1.知識・技能

2.知識・技能を活用して、自らの課題を発見し、その解決に向けて探求し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力（以下「思考力・判断力・表現力」という。）

3.主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（以下「主体性・多様性・協調性」という。）[3)]

高等学校教育改革では、「学力の 3 要素」の確実な育成を、大学入学者選抜改革では、「学力の 3 要素」の多面的・総合的評価を、大学教育改革では、「学力の 3 要素」の更なる伸長が示され、大学教育では、高校までに培った力を更に向上・発展させ、社会に送り出すための教育が求められてきている。

入口戦略を「学力の 3 要素」、出口戦略を「学士力」と捉えると、入学時は「学力の 3 要素」に着目し、入学後に更なる伸長をすることで「学士力」を高めていくことが求められている。

そこで、本研究では、新たに入学してくる学部留学生のレディネス調査、特に「学力の 3 要素」の「1. 知識・技能」および「学士力」の「1. 知識・理解」以外を汎用的技能のジェネリックスキル（以下「ジェネリックスキル」）と捉え、学部留学生のジェネリックスキルを調査分析するため、学部留学生を対象とした入学前事前学習プログラムを新たに開発し、どのような入学前事前学習プログラムが学部留学生にとって効果的なのかを考察した。また、入学前研修の結果について、学部留学生の初年次教育の「基礎ゼミ」などのクラス分けの資料とした。

*1　至誠館大学　現代社会学部

2　先行研究の概観と仮説の設定

2.1　日本人対象のプログラムについて

大学入学前教育は選抜試験合格後、入学手続きの完了月と入学する新年度の4月までの間の期間に大学での学びへの移行をスムーズに行うために実施されるプログラム全般を指す。教育内容は、高大接続を意識した高等学校までの基礎学力の確認、不足している基礎学力を補うリメディアル教育（主に理工系大学にみられる）、情報倫理・情報セキュリティ関連教育、指定書籍を読んで感想文を書かせるなどのその他広く教養を高めるものなどがある。プログラムの実施方法も課題対応、講義を伴うもの、最近ではeラーニングで行うものなどあり、講義形式をとる場合、合宿を行うなど複数日にわたる形式のものもある。実施の種類、方式が各大学によりまちまちであるため、目的も大学により異なるが、大手進学サイト「マイナビ進学」[註1]では

・学びへのモチベーションの維持
・事前に大学での学びを知る
・大学での学びに対する不安の解消

を挙げて大学進学予定者向けに情報発信しており、概ね実施する大学側の目的も同様と考えられる。大手予備校の関係機関では大学支援プログラムとして大学入学準備プログラムを個別・パッケージ販売するところもあり、KEIアドバンス提供のものは上記の分類と一致している。[註2]

国立大学や学生数の多い私立大学ではプログラムを作る専門の機関を擁するところもある。例えば、徳島大学では教養教育院がその役割を担っている[註3]。

こうした入学前学習プログラムでは受講生の汎用的能力等の測定を主眼に置いているものは少なく、取り組みの報告は公開されている（例えば田上2019）[4]が、PROGを用いて（宮脇、小森、前田2017）[5]、あるいはSPIを用いて（大塚2022）[6]、あるいは基礎数学を用いて（上原、友安、赤池、新井2019）[7]計測し、これから評価に入るというものが大勢である。

また、これらは日本人学生向けに展開されるものが主で、留学生向けのものは日本語教育関連のものがみられるのみで、例えば、東洋大学の事例[註4]のように留学生向け選抜で合格したものは対象にしていないケースがほとんどである。

2.2　留学生対象のプログラムについて

学部留学生の入学前研修についての事例も数多く見られる。しかし、種類や実施方法については、各大学、学部学科によってさまざまであり、プログラムの目的も基礎学力を測るものもあれば交流会的なものも存在する。また、入学前オリエンテーションとして、在留資格の話や奨学金についてなど、大学生活を送るうえで必要な情報を提供するため実施したりしている。留学生だからといって特別視せず日本人学生と同様の内容を実施している大学もあれば、留学生だけの特別プログラムとして実施している大学もあり、実施している大学の中には、日本人向けに実施しているが留学生は対象ではないという大学も存在した。

母国から直接入学する国費留学生や交換留学生についての入学前研修については、各大学で入国後にオリエンテーションなどを実施し、日本での生活について、大学のルールなどを説明し、その際、日本語の試験などを実施する大学が多い。学部留学生の多くは日本国内の日本語学校等の予備教育機関を卒業して進学してくるため、日本滞在歴も半年から数年という学生が多い。そのため、学部留学生については、基礎学力の試験を実施している大学が多い。最近の傾向として、オンラインで実施している学校も散見される。

先行研究としては、外国人留学生の入学時の日本語の基礎学力を測るためのプレースメントテストについての研究は数多く存在するが（例えば、京、2022；荒、2016他）[8][9]、それらの多くは、外国人留学生向けの入学前研修について示されているわけではない。また、日本語プレースメントテストで測ることができる能力は、学力の3要素では日本語の「知識」にあたり、ジェネリックスキルを測るためのテストとはならない。

外国人留学生向けの入学前研修についての研究は、大学院留学生の入学前プログラムの開発についての報告（平田 2008）[10] や、留学生の大学入学前教育にはどのような媒体が有効なのかを調査分析した研究（市原 2021）[11] 等いくつか散見はされるが、学部留学生の入学前研修に着眼した研究報告は決して多くない。

2.3　仮説の設定

今回は「レポート課題を書いて提出する」という課題に対して以下のような問題行為が見られた。

①不正なコピー&ペースト（以下、コピペ）と思われるレポートを提出した

②出題と解答が違うレポートを書いて提出した

③規定の文字数に達していないレポートを提出した

④期限までに提出しなかった

これらは、レポート課題という与えられた課題に対して正しく理解ができておらず、ジェネリックスキルが低いと捉え、どのような学生が該当するのかを入学前研修で調査分析を行った。そこで、以下の 3 点の仮説を立て、入学前事前学習プログラムの結果から検証を試みた。

仮説 1：小テストの高得点の学生はジェネリックスキルも高い傾向がある

仮説 2：日本滞在歴が短く日本語能力に不安がある日本語学校修了生よりも日本滞在歴が比較的長い専門学校・短大卒業生の方がジェネリックスキルは高い

仮説 3：出身国による違いがある

3　本学の東京キャンパスにおける入学前教育の取り組み事例

3.1　令和 3 年度入学者までの取り組み

本学では入学後の中退率が長らく問題となっており、その低減は喫緊の課題となっている。過去の中退に関する本学のデータから、2 年次修了時までに中退するものの多くが集中し、3 年次以降は概ね見られなくなることから、入学前学習プログラムを通じて

1. 入学予定者の意識を高く位置づけること
2. 何らかの評価指標で事前に中退につながる要因を持つものを特定しケアすること

の 2 点の達成を目的としてきた。こうした目的意識から、選抜試験の日程別に合格者を 12 月から 3 月までの間の、現籍校の授業に支障をきたすことのないと考えられる土曜日の午後に登校させたうえで①今後の学生生活上の注意事項の徹底をはかるとともに、②学習理解度確認アンケート調査を含む入学前学習プログラムを令和 3 年度まで実施した。①②とは別に外部試験を利用した語学のクラス分け試験、学内ポータルサイトで利用する写真撮影も併せて実施している。

3.1.1　学生生活上の注意事項について

「学生生活上の注意事項」とは以下の項目を指す。

1. 大学の連絡先（東京キャンパスの電話番号や入学予定者専用に入学予定者向けの情報を掲示する自前の Web サイトの URL）をスマートフォンなどに登録してもらう
2. 合格に慢心せず、現籍校での出席率を 80%以上に維持すること
3. 資格外活動に関する注意（アルバイトが週 28 時間以上になることがないようにすべきことや留学生が行うのに適当と思われないアルバイトの具体例の提示など）
4. オリエンテーションやガイダンスなど，出席しなければ以降の学修に支障をきたすと考えられる行事への参加を求めること
5. 住所変更や在留資格の期間更新に関連する書類など、大学が求めた書類を期限までに提出すること
6. 大学に登校する際には在留カード、学生証、ノート、ペンを持参すること
7. 銀行口座の売買、第 3 者宛の荷物の受け取り、他人名義のクレジットカードの保持や利用など

犯罪や幇助行為を行わないこと

8. 納税や社会保険料（国民年金保険料、国民健康保険料）の適正納付すること

主に在留資格の期間更新が円滑に進むために必要と思われる項目として上記項目が選ばれた。入学後、実際に講義を受講して内容を理解し、要点を憶えるといったことは非常に重要であるが、それ以上に学修を継続するためにも必要不可欠と考える在留資格に関わることに絞り、全受講生が必要と思われる事柄を事前に確認する点に重点が置かれている。こうした事前学習プログラムには「学習理解度確認アンケート調査」を実施し上記項目に関してどの程度理解しているかをWeb 上から選択式・記述式で確認するもので、20 分程度ですべて回答できる分量となっている。

3.1.2　学習理解度確認アンケート調査について

学習理解度確認アンケート調査では、アルバイトの時間や源泉徴収票や給与明細をきちんと管理できているかどうか、貯金など長期的な生活を視野に入れた日本で適切な生活を送れているのか、自己管理能力はあるか、を確認するような質問を行った。学習意識の低いまたは生活環境が悪いとみられる学生を入学前に発見し、入学後の「基礎ゼミⅠ」のクラス分けの基準とした。本学では「基礎ゼミ」等が、初等中等教育における「クラス」の役割りを果たすとともに、入学後 4 年間の学修上、必要な規則等を身に着けてもらう役割も果たすため、ゼミ担当教員のための学生指導上の指針としてもらうことも目的としていた。

令和 3 年度までは、

A クラス:事前教育参加不十分(アンケート未取得)

B クラス：アンケートの評価数値が低い

C、D クラス：それ以外

とクラスをわけて編成し、学生の成績、出席率、レポート等の提出物の提出状況をもって、こうしたクラス分けの効果を把握しようとしたが、あまり顕著な違いを見出すに至らなかった。強いて言えば、B クラスはクラス分けによりアンケートの評価数値が低い学生の可視化がなされたことに伴う出席率の底上げがされていることが示唆された。

3.2 新しい入学前事前学習プログラム取り組みについて

前述の通り、本学東京キャンパスでは令和 3 年度まで選抜試験の日程別に入学予定者を半日登校させた上で必要最小限と思われる入学前事前学習プログラムを実施してきた。しかし、高大接続の観点からより充実したプログラム化を目指し新しい入学前学習プログラムでは従来のプログラムを整理したうえで半日から 2 日間に拡大し「学習理解度確認アンケート調査」を 8 つのプログラム講義後の小テストに代替することとした。

新プログラムは 3 月下旬に実施することとなったため、これまで 12 月から 3 月に実施していた半日登校による事前プログラム（オリエンテーション）は 3 月下旬のプログラムの開催案内、入学前手続き書類の確認、再提出や、これまでの「学生生活上の注意事項」の以下の項目に絞った話をする場となった。

1. 大学の連絡先をスマートフォンなどに登録してもらうこと
2. 合格に慢心せず，現籍校での出席率を 80%以上に維持すること
3. 資格外活動に関する注意

入学前学習プログラムの前に半日間のオリエンテーションを挟んだのは、前年 10 月より始まる選抜試験の日程での合格者にとり、3 月下旬の入学前学習プログラムは合格から入学までの期間が離れすぎておりその中間を埋めることも意図されている。なお、選抜試験が 3 月期のものについては入学手続き完了まで間がないため、3 月下旬のプログラムではなく、別途新年度開始後に補講的なプログラムを実施している。

3.2.1 事前課題作文

選抜試験が早い日程の合格者にとり入学手続き完了から3月下旬の入学前事前学習プログラムまでの期間は間伸びすぎるため、半日のオリエンテーションにくわえて入学前事前学習プログラム初日までを締め切りに、事前に回答してもらう「課題作文」を3題用意し入学予定者に登校日に配布ないし郵送配布している。

令和4年度の課題は以下の通りである。各600字程度の回答を本学指定の原稿用紙に手書きで回答するよう求めた。

1. 日本への留学理由
2. 本学学部学科専攻への志望理由
3. 「約束を守ること」の意義について

1と2は選抜試験時の面接でも口頭で確認しているが、あえてまとまった量を作文させることで論理性を確認することを目的としている。基本的に自分自身のことを書くものであるため、いわゆるコピペは意味をなさない課題になっている。また、これまでの「基礎ゼミ」等の担当教員の印象から、形式を守った作文ができるものや、読み手を意識した字を書けるかが「知識・技能」以外の重要な項目と思われる、との示唆があったため、その点の確認も兼ねている。

3の「約束を守る」はあえて回答しにくい課題としてそれにどのように対応するか観るためのものである。1と2と異なり一見するとコピペで形式だけはごまかせそうであるが「あなたはどう考えますか」という問いかけをすることでやはりこちらも自分自身の考えを述べなければ意味がない課題である。また、入学後にルールや規則を守ることの重要性や期限という約束を守ることを考えるきっかけにしてほしいという意図もあった。

3.2.2　入学前事前学習プログラムの目的

今回の入学前事前学習プログラムは、従来は入学後に実施していたものを拡充し、学籍番号等のID発給後にしか学習できないものは入学後に回し、学籍番号等がなくとも可能な学習プログラムを前倒しに学んでもらうことを目的とした。

このプログラムを通じて、①「学力の3要素」を涵養する前提、②4年間ないし2年間の学びを確実に継続するための前提を入学前に身に着けてもらう予定である。

3.2.3 対象者

正規の学部生、1年次新入生および3年次編入生に対して実施した。対象者は、1年次新入生は32名（中国24名、ベトナム4名、ウズベキスタン2名、台湾1名、ミャンマー1名）、3年次編入生（中国10名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名、ホンコン1名）であった。

最終学歴は、1年次新入生は、日本語学校修了生は20名（中国17名、ベトナム1名、台湾1名、ウズベキスタン1名）、専門学校・短大卒業生は12名（中国8名、ベトナム3名、ウズベキスタン1名、ミャンマー1名）、3年次編入生は、日本語学校修了生は2名（中国2名）、専門学校・短大卒業生は11名（中国8名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名、ホンコン1名）であった。

3.2.4 構成

このプログラムは2日間かけて実施した。時間配分に関しては表1の通りである。

表 1　時間配分

日時	1 日目	2 日目
9:30～10:00	開会・事前説明	開会・事前説明
10:00～10:10	学生教室移動	学生教室移動
10:10～10:40	講義 1 回目	講義 1 回目
10:40～10:50	休憩（出席確認・採点）	休憩（出席確認・採点）
10:50～11:00	学生教室移動	学生教室移動
11:00～11:30	講義 2 回目	講義 2 回目
11:30～11:40	休憩（出席確認・採点）	休憩（出席確認・採点）
11:40～11:50	学生教室移動	学生教室移動
11:50～12:20	講義 3 回目	講義 3 回目
12:20～12:30	休憩（出席確認・採点）	休憩（出席確認・採点）
12:30～13:30	昼休み	昼休み
13:30～14:00	講義 4 回目	講義 4 回目
14:00～14:10	休憩（出席確認・採点）	休憩（出席確認・採点）
14:10	受講票の確認後、終了	受講票の確認後、終了

講義時間は小テスト・課題作成を含めて 30 分とし、おおよその時間の目安は以下の通りである。

・講義のねらいの説明　…2 分
・講義　…15 分
・まとめ　…3 分
・小テスト又は課題　…10 分
・休憩（出席確認・採点）…10 分

セクションは 8 つとし、1 日 4 つのセクションを実施することにした。講義内容については表 2 の通りである。

表 2　各セクションの講義内容

§番号	講義内容	担当日
1	ノートのとり方について	1 日目
2	レポートの書き方について	1 日目
3	定期試験に向けての準備の仕方について	1 日目
4	取得単位や成績評価について	1 日目
5	必要書類の記入の仕方について	2 日目
6	緊急性の高い学則について	2 日目
7	学生生活での注意点について	2 日目
8	レポート課題の確認とフィードバックについて	2 日目

①大学での講義を受けるベース、いわばジェネリックスキルにかかわること、②円滑な学修のための2点を最低ラインとして設定した。セクション1、2、3、4は①を目的に設定されている。セクション5、6、7、8は②である。こうしたミニ講義を通じて、学びとは何か、を感じ取ってもらうことに注意して講義を行ってもらった。

3.2.5 留意点

それぞれのセクションの担当者に向けての留意点としては以下の通りである。

- 講義開始時に「講義のねらい」を簡単に説明してください。
- 講義終了時に「はなしたこと」をまとめてください。
- 小テストを実施してもらいたい講義では、まとめの重要箇所をどの程度理解したか小テストを作成してください。
- 小テストの形式は【○×問題　穴埋め　論述】のいずれでも構いませんが、かならず合格点を受講生にあらかじめ提示し、不合格者にはなぜ不合格なのか、どの点が不足しているのかわかるようにしてください。
- 課題を実施してもらい講義終了時に課題をさせてください。
- 小テストの採点または課題の確認は【休憩（出席確認・採点）】の時間（10分）で行ってください。採点または課題の確認後は、合否を＜受講証＞に捺印してください。
- 講義内容については必ずペンとノートを利用してノートテイキングするよう促してください。なお、ノートテイキングとは何かについては§1の講義で話す予定ですので、「講義はノートをとるもの」とだけお伝えいただければ結構です。
- 1日に4回の講義をしてもらいます。
- 4回とも同じ内容の講義を同じ教室でしてもらいます。
- 1班20名程度になるようA～Dの計4班に班分けを行います。学生は班ごとに受講します。
- 受講証は2日間使用し，2日目が終わった際に受講票は回収します。
- 1日のプログラムが終了したら801教室にて受講票を確認します。その際、不合格の学生は居残り指導をします。なお、居残り指導については、不合格を出された方にお願いします。

3.2.6 講義内容

セクション1では「ノートのとり方について」とし、主な講義項目は①ノートテイキングのポイント、②ノートテイキングの方略、③実際に書かせたノートの確認とした。

講義のねらいとしては「自分に必要な情報や知識を取捨選択してまとめる活動をおこなう上でノートをとることは必須の行為と考えられます。この講義ではノートテイキングについて16のポイントと6つの方略の形で提示しますので、ポイント方略すべてお話いただいても結構ですし、講義担当者が必要と考えるものを抽出してお話いただいても結構です。」とし、評価のポイントについては「講義されたポイントの説明をどの程度理解しているか確認して下さい。実際につくられたノートそのものを確認されても構いません。当日ノートを持参していないものが必ずいると思われますので、A4の紙を1枚渡して実際に書かせても結構です。」とした。

講義内容と活動例としては、魚崎（2017）の大学生によるノートテイキングとこれまでに受けた指導を参考に、以下のポイントに注意するよう依頼した。

●以下のノートテイクの16のポイントを理解する。

(1) 学習の流れがわかるように書くこと

(2)「この講時に学ぶこと」や「まとめ」をはっき

り書くこと

(3) 復習をしやすいように書くこと

(4) 重要な語句を書くこと

(5) 文字数を少なくすること

(6) 大切な情報を選んで書くこと

(7) 多くの量を書くこと

(8) 黒板（スクリーン）に提示された情報を書くこと

(9) 自分の考えを書き込むこと

(10) レイアウトを工夫すること

(11) 丁寧に書くこと

(12) 見やすい大きさの文字で書くこと/ノートをケチらず書くこと

(13) 色使いを工夫すること

(14) 余白を十分にとること

(15) 正しい内容を書くこと

(16) 板書だけではなく，話者の話した内容や情報も書くこと[12)]

さらに、齋藤・源田（2007）のノートテイキングにおける方略使用の効果に関する研究を参考に、以下のポイントにも注意するよう依頼した。

●ノートテイクの方略について理解する。

(1) 箇条書き：数字や点がついたリスト

(2) 文字の強調：ノートテイカーの標準的な文字と比べて明らかに太い・大きい文字

(3) 図表：1まとまりの図表

(4) 下線：一続きの下線

(5) 囲み：一続きの文字の囲み

(6) 矢印などを使った図式化[13)]

セクション2では、「レポートの書き方について」とし、主な講義内容は①大学生に求められる文章力とは、②レポートを書く時のポイント、③レポートを作成する時のポイント、④次回の課題の確認とした。講義のならいとしては「4年間または2年間の学生生活の中で、各種レポート（論理的記述）の提出を求められる機会が必ずあると思います。感じたままを自由に書く感想文（作文）とレポート（論理的記述）は似て非なるものであること、また、レポート（論理的記述）には一定の「作法」に基づいて書かなければならないことを簡単に講義いただければと思います。」とし、評価のポイントについては「次の日のセクション8に提出させる課題を出してください。コピペの有無の確認のための課題なので400字程度の内容で結構です。また、レポートを書くときのポイント、作成するときのポイントの解説を理解しているかご確認ください。○×形式で確認することが適当かと思われます。」とした。講義内容と活動例としては以下の点に注意するよう依頼した。

●大学生に求められる文章力（論理的記述）とは

・ものごとを客観的に捉え、考え、問題解決に至ることができる

・自分の考えを、筋道を立てて、正確かつ分かりやすい言葉で伝えられる

●レポートを書く時のポイント

・大学のレポートは、大きく「論考型」「自由記述型」「試験・実験型」の3種類

・レポートを書くポイントは3つ

① 見た目を整える

② 自由課題の場合は対象が狭く深く設定されているか

③ 文章構成を覚える

●レポートを作成する時のポイント

・レポートを作成するポイントは3つ

① しらべる

② 自分で考える

③ 書く

・形式（以下のものを書く）

① 講義名

② 担当教員名

③ レポートの題名

④　提出日
⑤　学部
⑥　学科
⑦　学籍番号
⑧　名前
⑨　参考文献（引用）を明記する

・見た目（紙で提出する場合）
①　ホチキスで左上を固定
②　シワや汚れを付けない

・内容について
①　序論（1 割程度）
何を考察するのか、なぜ考察するのか、論点問題点は何か
②　本論（8 割程度）
自分はどう考えたのか、他者はどう考えているのか、どんなデータがあるのか
③　結論（1 割程度）
レポートの総括を短く書く、今後の課題をまとめる

セクション 3 では、「定期試験に向けての準備の仕方について」とし、主な講義項目は①いつからはじめるべきか、②どのようなことをすべきか、③小テストとした。講義のねらいとしては、「テスト攻略法を講義することが大学生向けの講義として正しいかは疑問がありますが、単位を効率的に取得しなければ卒業が難しくなるのも事実です。本学では定期試験は筆記試験を原則としていますが、その他レポート・実習・実技により評価される場合もあります。そこで、いつからはじめるべきか、どのようなことをすべきか（全期間を通じて、直前期に、など）を講義いただければと思います。ご自身の講義におけるものをお話いただければ結構です。」とし、評価のポイントについては「いつからはじめるべきか、どのようなことをすべきか、をお話いただき、それを正確に理解しているか確認してください。○×形式で確認することが適当かと思われます。」とした。

セクション 4 では、「取得単位や成績評価について」とし、主な講義項目は①単位取得について、②成績評価について、③小テストとした。講義のねらいとしては、「卒業するためには、基礎教育科目 30 単位以上、専門教育科目 74 単位以上、合わせて 124 単位以上の取得が必要であること、成績評価は 100 点満点で採点し、60 点以上を得た場合にその科目の単位取得を認めることを講義してください。また、成績評価には秀・優・良・可・不可・未履修などがあることを説明してください。」とし、評価のポイントについては「講義内容を正確に理解しているか確認してください。○×形式で確認することが適当かと思われます。」とした。

セクション 5 では、「必要書類の記入について」とし、主な講義項目は①どのような必要書類があるのか、②書き方例の提示、③実際に書いたものを確認とした。講義のねらいとしては、「入学後は毎月の動静表、学生原簿変更届、アルバイト届、休学届、学納金の分納申請書類など各種書類を書く機会があります。どのような種類の書類を、何の目的で作成し提出しなければならないかをご説明ください。また、書類はボールペン（黒または紺）で書くよう指導してください。」とし、評価のポイントについては「実際に動静表、アルバイト届を書かせ、抜けがないか、正確に書けているかをご確認ください。アルバイト届は、アルバイトしていない学生はその場で提出させてください。なお、時間内に書けなかった学生はプログロム終了後に 801 教室に居残りになります。」とした。

セクション 6 では、「緊急性の高い学則・規則について」とし、主な講義項目は①緊急性の高い学則・規則にはどのようなものがあるのか、②学籍管理、学納金について、③小テストとした。講義のねらいと

しては、「学籍管理（第4章）、学納金（第8章）に

評価のポイントについては、「講義内容を正確に理解しているか確認してください。○×形式で確認することが適当かと思われます。」とした。

セクション7では、「学生生活での注意点について」とし，主な講義項目は①学生生活について、②資格外活動（アルバイト）について、③小テストとした。講義のねらいとしては、「入学から卒業まで学生生活を全うしてもらうために、例えば資格外活動についてどのような点に注意してほしいか講義してください。」とし、評価のポイントについては,「講義内容を正確に理解しているか確認してください。○×形式で確認することが適当かと思われます。」とした。

セクション8では、「レポート課題の確認とフィードバックについて」とし、主な講義項目は①課題の確認、②学生へのフィードバックとした。講義のねらいとしては、「セクション2の内容を理解して書いているかを確認してください。学生に向けて書けたかどうかのフィードバックをしてあげてください。」とし、評価のポイントについては、「特にコピペの確認をしてください。」とした。

4　分析結果と仮説の考察

「学力の3要素」の「知識・技能」を診るセクションとしては8つのセクションのうちセクション3、4、6、7であり、講義で学んだことが理解できたかを問う小テストを実施した。また、ジェネリックスキルを診るセクションとしてはセクション1、2、5、8であり、課題提出状況により能力の有無を判断した。特に課題提出に関してはセクション2と8の結果を着目した。各セクションの合否の結果により、以下⑴～⑸の5つのタイプに分類をした。

⑴　全て合格した者

⑵　1つのみ不可者の者

関する諸規則を学習してもらうものです。」とし、

⑶　2つ以上不可者の者

⑷　3つ以上不可者の者

⑸　遅刻者（一部不参加者）

⑴　全て合格した者は、1年次新入生5名（ベトナム2名、中国3名）、3年次編入生9名（中国5名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名、ホンコン1名）だった。日本語学校修了生は、1年次新入生2名（中国1名、ベトナム1名）、3年次編入生0名だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生3名（中国1名、ベトナム2名）、3年次編入生9名（中国5名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名、ホンコン1名）だった。

⑵　1つのみ不可者の者は、1年次新入生10名（中国7名、ウズベキスタン2名、ベトナム1名）、3年次編入生4名（中国4名）だった。日本語学校修了生は、1年次新入生5名（中国4名、ウズベキスタン1名）、3年次編入生3名（中国3名）だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生5名（中国3名、ベトナム1名、ウズベキスタン1名）、3年次編入生は3名（中国3名）だった。また、セクション8のみ不可者は4名（中国4名）、セクション4のみ不可者は5名（中国2名、ウズベキスタン2名、ベトナム1名）、セクション6のみ不可者は1名（中国1名）だった。

⑶　2つ以上不可者は、1年次新入生9名（中国9名）、3年次編入生0名だった。日本語学校修了生は、1年次新入生9名（中国9名）、3年次編入生0だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生2名（中国2名）、3年次編入生0だった。また、セクション4と8の不可者は9名（中国9名）、セクション3と8の不可者は1名（中国1名）、セクション7と8の不可者は1名（中国1名）だった。

⑷　3つ以上不可者は、1年次新入生3名（中国2

名、台湾 1 名）、3 年次編入生 0 だった。日本語学校修了生は、1 年次新入生 2 名（中国 1 名、台湾 1 名）、3 年次編入生 0 だった。専門学校・短大卒業生は、1 年次新入生 1 名（中国 1 名）、3 年次編入生 0 だった。また、セクション 3 と 4 と 8 の不可者は 1 名（台湾 1 名）、セクション 1 と 7 と 8 の不可者は 1 名（中国 1 名）、セクション 4 と 7 と 8 の不可者は 1 名（中国 1 名）だった。

⑸ 遅刻者（一部不参加者）は、1 年次新入生 3 名（中国 2 名、ミャンマー1 名）、3 年次編入生 1 名（中国 1 名）だった。日本語学校修了生は、1 年次新入生 2 名（中国 2 名）、3 年次編入生 1 名（中国 1 名）だった。専門学校・短大卒業生は、1 年次新入生 1 名（ミャンマー1 名）、3 年次編入生 0 名だった。

なお、セクション 8 の不可者の理由は「不正なコピペと思われるレポートを提出した」「出題と解答が違うレポートを書いて提出した」だった。

表 3　日本語学校修了生

	1 年次新入生 （N＝20）	3 年次編入生 （N＝2）
⑴ 全て合格した者	ベトナム：1 名 中国：1 名	該当者なし
⑵ 1 つのみ不可者の者	中国：4 名 ウズベキスタン：1 名	中国：1 名
⑶ 2 つ以上不可者の者	中国：9 名	該当者なし
⑷ 3 つ以上不可者の者	中国： 1 名 台湾：1 名	該当者なし
⑸ 遅刻者（一部不参加者含む）	中国 2 名	中国：1 名

表 4　専門学校・短大卒業生

	1 年生 （N＝12）	3 年次編入生 （N=12）
⑴ 全て合格した者	ベトナム：2 名 中国：1 名	中国：5 名 ベトナム：2 名 ウズベク：1 名 ホンコン：1 名
⑵ 1 つのみ不可者の者	中国：3 名 ベトナム：1 名 ウズベキスタン：1 名	中国：3 名
⑶ 2 つ以上不可者の者	中国：2 名	該当者なし
⑷ 3 つ以上不可者の者	中国： 1 名	該当者なし
⑸ 遅刻者（一部不参加者）	ミャンマー：1 名	該当者なし

更に、「課題提出」の状況を調べた結果は、以下の4つに分類をした。

① 3つの課題に問題のない者
② 1つだけコピペと思われる者
③ 2つ以上コピペと思われる者
④ 未提出者（一部のみ提出者も含む）

①3つの課題に問題ない者は、1年次新入生6名（ベトナム1、中国3名、ウズベキスタン1名、ミャンマー1名）、3年次編入生8名（中国5名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名）だった。日本語学校生は、1年次新入生3名（中国3名）、3年次編入生1名（中国1名）だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生3名（中国1名、ウズベキスタン1名、ミャンマー1名）、3年次編入生7名（中国4名、ベトナム2名、ウズベキスタン1名）だった。

②1つだけコピペ思われる者は、1年次新入生10名（中国9名、ベトナム1名）、3年次編入生4名（中国3名、ホンコン1名）だった。日本語学校修了生は、1年次新入生8名（中国8名）、3年次編入生1名（中国1名）だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生2名（中国1名、ベトナム1名）、3年次編入生3名（中国2名、ホンコン1名）だった。

③2つ以上コピペと思われる者は、1年次新入生7名（中国5名、台湾1名、ベトナム1名）、3年次編入生3名（中国2名、ホンコン1名）だった。日本語学校修了生は、1年次新入生4名（中国3名、台湾1名）、3年次編入生は0名だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生3名（中国2名、ベトナム1名）、3年次編入生は0名だった。

④未提出者（一部のみ提出者含む）は、1年次新入生9名（中国7名、ベトナム1名、ウズベキスタン1名）、3年次編入生2名（中国2名）だった。日本語学校修了生は、1年次新入生5名（中国3名、ベトナム1名、ウズベキスタン1名）、3年次編入生0名だった。専門学校・短大卒業生は、1年次新入生4名（中国4名）、3年次編入生2名（中国2名）だった。

表5　日本語学校修了生

	1年次新入生 (N=20)	3年次編入生 (N=2)
①3つの課題に問題ない者	中国：3名	中国：1名
②1つだけコピペと思われる者	中国：8名	中国：1名
③2つ以上コピペと思われる者	中国：3名 台湾：1名	該当者なし
④未提出者（一部のみ提出者も含む）	中国：3名 ベトナム：1名 ウズベキスタン：1名	該当者なし

表 6　専門学校・短大卒業生

	1 年次新入生 (N＝12)	3 年次編入生 (N＝12)
①3 つの課題に問題ない者	ベトナム：1 名 ウズベキスタン：1 名 ミャンマー：1 名	中国：4 名 ベトナム：2 名 ウズベキスタン：1 名
②1 つだけコピペと思われる者	中国：1 名 ベトナム：1 名	中国：2 名 ホンコン：1 名
③2 つ以上コピペと思われる者	中国：2 名 ベトナム：1 名	該当者なし
④未提出者（一部のみ提出者も含む）	中国：4 名	中国：2 名

(1) の全て合格した者の「課題提出」状況は、1 年次新入生の 5 名は、①1 名（ベトナム 1 名）、②1 名（中国 1 名）、③1 名（ベトナム 1 名）、④2 名（中国 1 名、ベトナム 1 名）であり、3 年次編入生 9 名は、①6 名（中国 3 名、ベトナム 2 名、ウズベキスタン 1 名）、②2 名（中国 1 名、ホンコン 1 名）、③0 名、④1 名（中国 1 名）だった。(2) の 1 つのみ不可者のうち、小テストを実施しなかったセクション 8 のみ不合格だった者 4 名（中国 4 名）は、①1 名、③2 名、④1 名だった。

この結果、仮説 1 の「小テストの高得点の学生はジェネリックスキルも高い傾向がある」については、今回の「課題提出」状況から鑑みて「小テストの高得点の学生はジェネリックスキルも高い傾向がある」とは言えないことが示唆された。

また，仮説 2 の「日本滞在歴が短く日本語能力に不安がある日本語学校修了生よりも日本滞在歴が比較的長い専門学校・短大卒業生の方がジェネリックスキルは高い」であるが、「課題提出」状況やセクション 8 の合格率からみると、日本語学校修了生よりも専門学校・短大卒業生の方がジェネリックスキルは高い傾向にあると考察された。

最後に、仮説 3 の「出身国による違いがあるか」だが、ベトナムやウズベキスタンの学生に比較的優秀と思われる学生がみられた。非漢字圏の学生の方が漢字圏の学生よりもコピペをしていない傾向にあり、今回の結果としては、特にセクション 4 と 8 の不合格者の中国の学生の多くが②の 1 つだけコピペした者であったことが顕著だった。

5　まとめと今後の課題

新しい事前学習プログラムは, 新しい試みといってよい内容であるため、この取り組みを通じて今後どのような成果が出るかはこれからの調査による。ただし、すでに課題としてあげられることをまとめると以下の通りである。1 つはジェネリックスキルが低いと思われる学生への対応である。今回は事前学習プログラムを通じてジェネリックスキルをある程度測定し、それを学生指導に活用できないかの試みをスタートさせた。仮にジェネリックスキルがある程度計測できたとして、それが低いとみられる学習者に対してどのようなプログラムが必要かは今後の検討課題となる。また、事前学習プログラムを通じてクラス分けが入学者にあたえた効果の有無は令

和 4 年度の取得単位数と成績評価、出席率とレポート等の課題提出率を取得した上での比較・考察が必要であるため、当面は結果を期待できない。ただし、今回の取り組みから以下の点は示唆されると思われる。日本語学校修了生と専門学校・短大卒業生では後者の方が相対的にジェネリックスキルが高いと示唆されるが、専門学校・短大卒業生は日本語学校修了生よりも長い期間滞日して日本の慣習に馴染んでいること、専門学校では専門課程を日本語で学修することが主であり、その過程で汎用的能力が涵養されている可能性があること、また、アルバイト先等で多様な人材に触れることによる社会人基礎力を研鑽する期間が相対的に長いこと、がその理由として挙げられよう。ここから本学の「基礎ゼミ」のプログラムの再検討と、多様な人材と触れあう課外活動の充実が必要との結論を見出せるかもしれない。ただし、課外活動についてはそもそも汎用的能力や社会人基礎力の高いものの方が積極的に参加しようとすると考えられるため、因果関係の推定は慎重でなければならない。

［註］

・註 1　マイナビ進学「高校生のための進学ガイド」
https://shingaku.mynavi.jp/cnt/etc/column/step7/remedial/（アクセス日 2022.11.12）

・註 2　駿台教育研究所
https://www.sundai-kyouken.jp/support/supp_01.html（アクセス日 2022.11.12）

代ゼミ教育総研
https://www.yozemi-eri.com/support/prepare.php（アクセス日 2022.11.12）

KEI アドバンス
https://www.keiadvanced.jp/business/quality-assurance/#jumpToProgram（アクセス日 2022.11.12）

・註 3　徳島大学　教養教育院
https://las.tokushima-u.com/information-for-incoming-students/　（アクセス日 2022.11.12）

・註 4　東洋大学
https://www.toyo.ac.jp/nyugaku/all_campus/pre-education/（アクセス日 2022.11.12）

［引用文献］

1）文部科学省（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm（アクセス日 2022.11.12）

2）文部科学省（2015）『高大接続実行プラン』
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/__icsFiles/afieldfile/2015/01/23/1354545.pdf（アクセス日　2022.11.12）

3）文部科学省　高大接続改革 PT（2017）『高大接続改革の動向について』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/02/15/1381780_3.pdf（アクセス日 2022.11.12）

4）田上正範（2019）「新入生の意欲を掻き立てる入学前教育プログラムの実践報告」『追手門学院大学基盤教育論集』6，75-85

5）宮脇啓透・小森亜紀子　・前田純弘（2017）「学士（経営学）課程教育における学習効果の測定－ジェネリックスキルの直接評価得点と学内活動との相関分析－」『昭和女子大学現代ビジネス研究所紀要』3，1-9

6）大塚茂晃（2022）「SPI 模試にみる大学入学前教育の成果と課題－e ラーニングの取り組みの評価－」『千葉商大紀要』59，3，117-127

7）上原成功・友安一夫・赤池祐次・新井達也（2019）「基礎数学 I でのジェネリックスキルの測定」『独立行政法人国立高等専門学校機構香川高等専門学校研究紀要』10，83-92

8）京祥太郎（2022）「学部留学生向け日本語プレー

スメントテストの開発について」『至誠館大学研究紀要』9，101-106
9) 荒まゆみ (2016)「入学時の日本語プレイスメントテスト結果から見る留学生の日本語能力の一考察」『尚美学園大学総合政策研究紀要』27，71-88
10）平田純一（2008）「大学院留学生の入学前プログラムの開発－現状と課題－」『立命館高等教育研究』8，77－91
11）市原乃奈（2021）「留学生の「日本語」大学入学前教育にはどのような媒体が有効か」『拓殖大学日本語教育研究』6，23-56
12）魚崎祐子（2017）「大学生によるノートテイキングとこれまでに受けた指導」『玉川大学研究学部紀要』17，173-185
13）齋藤ひとみ・源田雅裕（2008）「ノートテイキングにおける方略使用の効果に関する検討」『日本教育工学会論文誌』31（Suppl.），197-200

謝辞　本研究は本学の「入学前事前研修プログラム開発ワーキンググループ」の構成メンバーにて実施したものです。本プログラムを実施するにあたり、講義を担当していただいた先生方には大変お世話になりました。深くお礼申し上げます。

The Endeavor of Pre-admission Education Program for Foreign Undergraduate Students

〇Shotaro MIYAKO　Toru YAKUSHIJ　Kenshu YAMAGUCHI

Abstract：Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology （MEXT） has recently made proposals regarding various qualities and abilities, such as "desired competency for bachelor's degree” （bachelor ability） and "three elements of academic ability”. In this study, in order to research and analyze the readiness of newly enrolled international undergraduate students, mainly focusing on the "general skills" of the "bachelor ability" and the "critical thinking, judgment and expression" （hereinafter referred to as "problem-solving ability"） of the "three elements of academic ability”, a new pre-entrance learning program for undergraduate international students was developed and analyzed to see what kind of program was effective. The program consisted of lectures on eight topics, followed by a quiz or assignment to test knowledge. As a result, students who had a higher percentage of correct answers in the quiz and thus deemed to have sufficient “knowledge” did not necessarily also have high "problem-solving ability”. It was also shown that foreign students who graduated from Japanese vocational schools tended to have higher "problem-solving ability" than those who completed Japanese language schools. These results indicate that international students also need to be trained in problem-solving skills in their first year of education.